鮫中

生徒の言語能力を高め、学びに向かう力を育成する指導の研究

～自分の考えをもたせる活動を中心として～

（３年計画の１年次）

校長名　　上野　裕治

１　研究主題について

本校生徒の実態として、「自己の生活をよりよく向上させようとする意識」、「学ぶことに対する意欲」、「コミュニケーション能力」の低さが課題として挙げられる。そこで本校では生徒が自らの生活を見直し、学習意欲を高めることができるように、「課題の提出」・「１分前着席」・「授業道具の準備」から成る「学習三原則」を定めており、日頃から教師が声を掛けたり、生徒会や学年プログラム委員会などと連携して達成状況を調べたりしながら、生徒に対し意識づけを図ってきた。また、コミュニケーションの活性化を目指して、各種調査や面談を通じて良好な人間関係づくりに努めるとともに、授業ではグループ活動やお互いにアドバイスをし合う対話活動を重点的に取り入れることで、発言しやすい雰囲気づくりを心がけてきた。特に年間６回の「学級話合い活動」では、自分の意見を表現しようとする生徒が増えてきている。

一方で、特に教科の授業においては自分の考えに自信がもてないことや、考えを分かりやすく伝えるための言語能力が乏しいことから、なかなか意見を表現できない生徒がみられる。さらには基礎・基本の定着が不十分であることから、自分の意見をもつことができない生徒も少なくない。これらの点を改善し、受け身の学習から主体的に参加する学習へと変えていくことが急務である。

そこで、今年度から改めて３年計画で「自分の考えをもつ」、「自分から表現する」、「互いに深め合う」と順を追って研究を進める。今年度は昨年度までの取り組みに加えて、言語能力の向上や基礎・基本の定着も大切にしながら、生徒全員が「自分の考えをもつ」ことを目標に、実践を行っていきたい。

２　研究のねらい

生徒に基礎・基本を定着させるとともに、言語能力の向上を図るとともに、生徒自身の「学びに向かう力」を育成する指導法の確立を目指す。

３　研究仮説

授業における導入場面や学習形態の工夫､授業と家庭学習との連携を図る取り組みを通じて、生徒に基礎・基本を定着させることや､授業などで自分の考えを表現する場を取り入れながら、生徒の言語能力の向上を図ることで、生徒が自信をもって発言したり考えを深めあったりできるようになり、ひいては主体的に学習に臨むようになるのではないか。

４　研究内容

(1) 基礎・基本の定着や言語活動の充実などの、教科の特質に応じた授業改善の推進
(2) 家庭学習の充実につながる「学び方」指導
(3) 特別支援教育の視点や、ＩＣＴの効果的な活用などを土台にした学ぶ環境づくり
(4) 自主的な態度を育てる学級・学年経営の推進

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	内容・講師・概要等
5	10	第１回小・中学校ジョイントスクール推進事業　授業参観研修
11	11	教育指導課・センター訪問
	29	第２回小・中学校ジョイントスクール推進事業　授業参観研修
1	20	授業参観月間（自分の考えをもたせる活動、特別支援の視点を取り入れた授業づくり、ICTを効果的に活用した授業づくりについて）（～２／17）

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
4	5	第１回校内研（研究主題の共通理解～昨年度までの取り組みと今年度の方針）
	21	第２回校内研（特別支援の視点を取り入れた授業づくりについて①）
	28	第３回校内研（自分の考えをもたせる活動について①）
5	19	要請訪問　「１人１台端末活用」一般研修 講師：八戸市総合教育センター　主任指導主事　大下　洋一
	20	第４回校内研（Chromebookの活用について）
8	20	第５回校内研（評価について①、指導案について）
9	15	第６回校内研（オンライン授業について）
	22	第７回校内研（評価について②）
10	20	第８回校内研（特別支援の視点を取り入れた授業づくりについて②）
11	17	第９回校内研（校外研修会報告①～GIGAスクールについて）
1	19	第10回校内研（授業参観月間①、校外研修会報告②～１人１台端末活用について）
2	16	第11回校内研（授業参観月間②、自分の考えをもたせる活動について②）
3	17	第12回校内研（年間の反省と次年度の研究方針について）

６　研究の成果

(1) 学校生活のさまざまな課題を話し合う「学級話合い活動」が、自分の考えをもち、表現することの基盤となっている。さらに今年度は、授業の導入を工夫したり、学び方を指導したりするなどの取組を通じて、生徒が自分の意見を考え、表現しようとする場面が以前に比べてみられるようになった。

(2) 「Chromebookの活用」について、校内研で共通理解を図り、相互に授業参観を行った。その結果、生徒の意欲喚起につながる活用法について、学び合うことができた。

７　研究の課題

(1) 「学級話合い活動」の時に比べ、教科の授業においては、自分の考えをもったり、表現したりできる生徒とそうでない生徒の差が大きい。自分の考えをもつためには、その基盤となる知識が必要不可欠であるため、考えをもたせる活動に加えて、基礎的・基本的事項のより一層の定着を図る方策が必要である。

(2) 「Chromebookの活用」に関する研修などを通じて、活用しようする意識の向上を図ることはできたものの、十分に活用できているかどうかについては、まだ教科や職員によって差があるのが現状である。よりよい活用法について、実践的に学ぶ方法を考えていきたい。

（記入者　中野　大輔）